

はじめに

チヨン ビヨン ウク いた がき りゆう た
鄭 昞 旭 ・ 板 垣 竜 太

哲学者チャールズ・テイラーは、西欧思想史を独自の観点からひもときながら、近代的アイデンティティの特徴の一つが「日常生活の肯定」であると論じた。すなわち、生きるために必要な物を作る生産（production）と、生殖や家族生活を中心とした再生産（reproduction）が重要視されるようになってともに、主観性や内面性が強調され、感情に対する称揚が広まったという¹。当然のことながら、生産と再生産を基軸とした日常生活自体は、近代の産物どころか古今東西の人類社会の根幹にある。にもかかわらずテイラーが「日常生活の肯定」を西欧近代と結びつけるのは、西欧の思想家たちが17世紀以降になってようやく日常生活を正面から思索しはじめたということであろう。

だが、ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つとはよく言ったもので、思想家たちが日常生活を概念化し得たのは、ヨーロッパにおいて私人が自らの日々の出来事を記録することが相当広まった後のことだった。個人が日常生活を記録した資料の代表格というべきものが日記であるが、西欧で私的な日記を書くことが広まったのはルネサンス期以降のことといわれている。文学研究者ディディエは、フランスで現存する最初期の日記の一つが15世紀

¹ チャールズ・テイラー『近代 想像された社会の系譜』（上野成利訳、岩波書店、2011年；Charles Taylor, *Modern Social Imaginaries*, 2004）、同『自我の源泉：近代的アイデンティティの形成』（下川潔ほか訳、名古屋大学出版会、2011年、第13章；*Sources of the Self*, 1989）。

パリの一市民^{ブルジョワ}のものであったことに注目しながら、都市と市民階級の勃興期と日記をつけることとの関係に言及している²。イタリア文化史研究者の根占献一は、14～16世紀に西欧に広まった日記の起源は会計等に関わる帳簿であったと指摘している³、本書所収のリヒター論文でも、ドイツにおいて日記を書くことと会計帳簿をつける精神との関係が示唆されている。つまり日記を書くことの一背景として、都市化や会計帳簿の拡大といった社会経済史的变化があったことが浮かび上がっている。その後16世紀頃より、内容が公的なもののみならず内面的なものが増えたり、記主が社会の上層から中・下層に拡大していき、18～19世紀にはそれが大勢となった⁴。

とはいえ、これは日記の成立史をめぐる一つのストーリーに過ぎない。西欧との比較でいえば、東アジアは明らかに日記の「先進的」な地域であり、それは必ずしも都市化や市民階級の成立と軌を一にするものではない⁵。

日記研究が最も広くおこなわれている日本についていえば、遅くとも9世紀末には官選ではない個人の日記が皇族や上級貴族のなかで記されてい

² ベアトリス・ディディエ『日記論』西川長夫・後平隆訳、松籟社 1987年、32頁 (Béatrice Didier, *Le journal intime*, 1976)。グスタフ・ルネ・ホッケ (Gustav René Hocke) は大著『ヨーロッパの日記』(石丸昭二ほか訳、法政大学出版局、1991年；*Das Europäische Tagebuch*, 1963)で古代から筆を起しているが、第Ⅱ部に集められた日記選は全てルネサンス以降のものである。なお、15世紀パリの一市民の日記については、渡辺一夫『乱世の日記』(講談社、1958年；『渡辺一夫著作集9』筑摩書房、1971年、所収)で詳細に紹介されている。

³ 根占献一『ルネサンス精神への旅』創文社、2009年、72-89頁。

⁴ 리하르트 반 뎀 펠 『개인의 발견』(최윤영 역, 현실문화연구, 2005, pp.189-206；Richard van Dülmen, *Die Entdeckung des Individuums 1500-1800*, 1997)。필립 아리에스, 로제 샤프티에 편『사생활의 역사3: 르네상스부터 계몽주의까지』(이영림 역, 새물결, 2003, 2부 5-6장；Philippe Ariès, Roger Chartier dir., *Histoire de la vie privée Tome 3: De la Renaissance aux Lumières*, 1986)。

⁵ 中東においても11世紀の日記原本が現存している。イスラームの聖典であるハディース(ムハンマドの言行録)に対する考証の必要性から、遅くとも9世紀には日記が記されていたという (George Makdisi, "The Diary in Islamic Historiography: Some Notes," *History and Theory*, 25(2), 1986)。西欧はユーラシアの日記文化においてはむしろ後発といえるかもしれない。

た。998～1020年にわたって記された藤原道長『御堂関白記』が現存する最も古い日記の原本で、具注暦と呼ばれるカレンダーの余白に書き込む形式（「暦記」という）となっていた。暦記のほか、中世には反故や白紙を使ったタイプの日記もあった。階層としては貴族層を中心としながら、中世を通じて僧侶、武士に、さらには地方へと次第に広まっていった⁶。近世には百姓、町人、郷土にまで日記が拡大した⁷。近世中期以降に庶民の日記が広まったのには、地域の有力者であり商品生産にも関わっていた「豪農」の存在が大きかった⁸。明治維新後、19世紀末から20世紀初頭には博文館などから罫線の入った日記帳が商品として売られるようになるとともに、学校で日記が教育手段として用いられるようになった。1910～20年代は「日記の時代」ともよばれるほど、日記を書くことが大衆化した⁹。

こうした日本の日記史の背景に、少なくともその初期において中国の文字文化の影響があったことは疑い得ない。日記文学研究者の玉井幸助による古典的な研究書によれば、漢代にまで遡り得る中国の「日記」の概念および慣行は、学者の研鑽記録と王者の言行記録という2つの源流をもって¹⁰。中国日記史研究者の陳左高^{チェンツォガオ}によれば、紀元前の前漢の宣帝時代（B.C.73-49）に平民が木簡に記した獄中日記が揚州から出土したことがあるが、現在までまとまって内容が伝わる文献のなかでは、唐代の文人・李翱^{リアオ}による半年間の紀行記録『来南録』（808）が、日記体で書かれた最も古い

⁶ 尾高陽介『中世の日記の世界』山川出版社、2003年。本木泰雄・松園斉編『日記で読む日本中世史』ミネルヴァ書房、2011年。

⁷ 深谷克己『近世人の研究：江戸時代の日記に見る人間像』名著刊行会、2003年、301-302頁。

⁸ 高木俊輔『近世農民日記の研究』塙書房、2013年、32-33頁。

⁹ 西川祐子『日記をつづるとのこと：国民教育装置とその逸脱』吉川弘文館、2009年、3-4章。山口輝臣編『日記に読む近代日本3 大正』吉川弘文館、2012年、1-12頁。

¹⁰ 玉井幸助『日記文学概説』目黒書店、1945年、9-20頁。同書は、日本の日記文学の特徴を歴史的に検討するために、まず約550点の中国の日記を収集整理している。皇国史観の制約があるため参照には注意を要するが、中国の日記のおおよその傾向はわかる。

ものの一つである。その後、宋代以降に、文人を中心に数多くの日記が書き残されるようになった¹¹。漢字文化の流入とともに、そうした中国の日記文化が日本列島にももたらされたと考えられるが、その展開の仕方は多少異なる。約550点の日記を検討した玉井によれば、中国の日記は紀行文や随筆的なものが多くを占めるという特徴を有しており、個人の日常的な事柄を日付入りで記録した日記は、宋代の^{ファンティンジャン}黄庭堅の『宜州家乗』（1105～06年）以降のことであるという¹²。

朝鮮においては、13世紀初めに高麗の文人・^{イギョボ}李奎報が漢文で書いた紀行文『南行月日記』が現存する最も古い文献とされるように、中国の日記文化の影響を大きく受けていた。朝鮮時代になると、在野に読書階級である士族が定着していくとともに、王朝内での日々の記録文化が地方にも広まり、とりわけ16世紀以降は^{リュヒチュン}柳希春の『眉巖日記』（1567～77年）など数多くの漢文日記が文人の手で記されることになった。この漢文日記の伝統は根強く、農村部を中心に20世紀半ばまでは持続が確認される¹³。ハンゲルによる日記がいつからどのように広まったかは不明だが、少なくとも政治家・^{ユンチホ}尹致昊が1880年代末に国文（ハンゲル）で日記を書いていた¹⁴。朝鮮時代の支配階層をこえてどのように日記が広まったのかも同様に未解明ながら、残された資料を見る限り、1920～30年代には新式教育を受けた「普通の人々」のなかで、市販の日記帳やノートに朝鮮語や日本語で日記を記す者

¹¹ 陈左高『中国日记史略』上海翻译出版公司、1990年、2-7頁；同『历代日记丛谈』上海画报出版社、2004年、1-4頁。

¹² 玉井幸助・前掲書、33-40、139-149頁。

¹³ 鄭求福「朝鮮朝 日記의 資料的 性格」『정신문화연구』19(4)、1996年。同論文には、当時まで収集された朝鮮時代の日記の目録がついている。また近現代朝鮮の日記資料や研究については、本書の 코리아 語版『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지와 국가』（소명출판, 2013）の巻末（432-446頁）に文献目録がある。

¹⁴ 尹致昊は1883年から1887年までは漢文で、1887年11月から1889年12月までは国文（ハンゲル）で、その後1943年までは英語で日記を書いた（金相泰編訳『윤치호 일기 1916-1943』역사비평사、2001、p.31）。

が相当いたことは確かである¹⁵。学校での日記教育と市販の日記帳の存在という点では、植民地朝鮮も日本と同様の日記の普及過程があったと見ることもできる。ただ母語ではない日本語が上から押しつけられ、初等学校の就学率も低く、中等・高等教育が抑制されていた植民地状況と「内地」の状況を同列に語れないことはいうまでもない。

いずれにしても個人が日記を記すことの広がりや、市民階級の勃興や「近代的個人主義」なるものの成立と単純に連動するわけではないことは確かである。むしろ紙や筆記具の手に入りやすさ、暦の存在、識字 (literacy) の広がりといった書記文化に関わる基礎的な諸条件があり、そこに政治経済の諸制度や諸個人が日々の記録を残す必要性が加わって、日記という書き物が成立したといえよう。

それでも日記の大衆化と近代という時代とのあいだに深い結びつきがあるのも間違いない。本書が注目するのも日記が語る近代の経験である。ここで「近代の経験」というのは「近代的な経験」ではないことに留意されたい。「近代的」や「近代性」といった概念がある指標や尺度をもって測ることもできるような「近代化」に関わる概念だとすれば、「近代」とはどこまでも現代に直結するような一回限りの時代概念である。本書のほとんどの論文は19世紀後半から20世紀前半に記された日記を扱っているが、それ以前の近世の日記も対象に含めている。近世を単純に「伝統時代」として近代から断絶させて対照するためというよりは、近代以降にも大きな影響を及ぼした日記文化のあり方を検証するためである。

近代の日記研究のなかでも、本書の特色の一つは朝鮮半島に軸足を置いているという点にある。日本では近年、吉川弘文館から西川祐子の『日記

¹⁵ 板垣竜太は1930年代にライオン歯磨が出していた日記帳を用いていた農村青年について論じたことがあるし (『朝鮮近代の歴史民族誌』明石書店、2008年、5章)、1920年代の朝鮮語の日記帳も所持している。また、本書所収の鄭炳旭論文も、経済的困難に陥った「普通」の朝鮮人青年が1930年代に博文館日記に書いたテキストを検討している。

をつづるということ』(2009年)、『日記に読む近代日本』全5巻(2011-12年)と、近代日本を日記から描き直す研究が続けて出たが、そこでは朝鮮人が書き綴った日記については検討の対象となっていなかった¹⁶。本書は12本の論文を収録しているが、1本が日本、2本がドイツで、あとの9本は朝鮮半島に関するものである。9本のうち、3本は朝鮮に渡った日本人の経験、6本は朝鮮人の経験を個人記録から読み解くものとなっている。時代としては近世(朝鮮時代)から植民地期を経て朝鮮戦争にまたがる。またそこで読み解かれる朝鮮人のリアリティも朝鮮半島のみにとどまらず日本、米国、中国などに及ぶ。その意味では、朝鮮半島の諸個人から歴史を描き直すユニークな試みとなっている。

このことから示唆されるように、個人の経験を日記から読み解くと、「狭い」領域しか見えないのではないかという先入観は誤っている。人は生きているなかでさまざまな人々と関係を結ぶ。個人は諸関係が折り重なる結節点である。その点においてフランスの社会学者アルヴァックスの集合的記憶論は示唆的である¹⁷。日記は通常、目の前で起きていることをリアルタイムで速記するというよりは、その日起きたことを後から思い出して言語化するわけで、そのかぎりにおいては記憶論にも関わる問題がある。アルヴァックスは、個人的な記憶であっても集団が記憶の枠組を提供すると論じた。家族であれ、友人であれ、職場の同僚であれ、対面状況にない人であれ、個人の経験は他者との関係のなかで構成されるからである。日記にもまた個人のその日の記憶が、書き手の関心と言語能力と余力の範囲で書き留められる。どのような人物であっても、そこにはさまざまな関係

¹⁶ 西川の本では、外国語で日本人が書いた日記や海外で日本人が書いた日記は研究の対象としている。また『日記に読む近代日本』では、朝鮮に渡った日本人(浅川巧)や、中国人・フィリピン人の日記は検討している。

¹⁷ M. アルヴァックス『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社、1989年(Maurice Halbwachs, *La mémoire collective*, 1950)。

性が否応なく刻み込まれ、また世界に対する記主のまなざしが形象化される。単一の物語で秩序化されていないテキストの断片群から、そうした社会性ないし世界性をどのように描き出すかは、読み手の歴史的想像力にかかっているのである。

高麗大学校民族文化研究院のHK 韓国文化研究団〔注：HKは人文韓国 Humanities Korea という政府の人文科学研究拠点形成プログラム〕は、「文化動学 (cultural dynamics)」という枠組によって、いわゆる「伝統時代」から現代にいたる韓国文化を動的・立体的に照明するために、さまざまな企画研究を推進している。そのうち「個人の伝統と近代」チームは、個人の生を中心軸として「近代化」過程を再検討しながら、個人にとっての「伝統」と「近代」の意味を解明するために、2011年の初め、韓国の研究者を中心として何人かの日本の研究者も参加して結成された。その主たる資料が日記であった。2013年5月に出版された韓国語版『日記を通じてみた伝統と近代、植民地と国家』は、企画研究チーム「個人の伝統と近代」の最初の研究成果である。同書は、2012年6月8日から9日にかけて開催された同題の国際シンポジウムをもとに編集したものであった。同シンポジウムは、韓国、日本、ドイツから参加した12名の研究者が3つの言語によって報告・討議するものであったが、「日記」という記録形態を中心資料とする点のみを共通項としていたにもかかわらず、たいへん濃密な意見交換をおこなうことができた。

本書『日記が語る近代』はその日本語版であるが、韓国語版の単なる翻訳ではない。この「はじめに」は、鄭炳旭が韓国語版の巻頭に書いた文章を、板垣竜太が日本語訳したうえで大幅に加筆した。それぞれの著者が修正や図版の追加をほどこした論文もある。ドイツの2本の論文は重訳にはせず、ドイツ語から新たに訳すことになった。別の出版計画との兼ね合いで韓国語版には収録されていなかった論文1本も、日本語版には収録され

ることになった。

第1部「個人記録から歴史を描き出す」は、日本とドイツの個人記録に関する基調的な論文をまとめた。英語の「エゴドキュメント (ego-document)」やドイツ語の「自己証言 (Selbstzeugnis)」は、ある個人が自らのことを中心に書いた記録全般を指す用語であり、具体的には日記のみならず書簡、回顧録などをも含む概念である。日本語では「個人記録」と総称しておく。まず、『日記をつづるということ』で近代日本の日記の諸相を論じた西川祐子は、自著の書評という形式をとりながら、近代国民国家と日記を書くこととの関係を再論している。クラウディア・ウルブリヒはヨーロッパにおける個人記録研究を概観しながら、新たなアプローチを提案している。この2本は、日記研究において考えるべき基本問題を提起しているといえる。

第2部は「近世に生き、死ぬ」と題し、18～19世紀の朝鮮とドイツの日記に関する2本の論文をまとめた。金何羅^{キムハハラ}は、18世紀の朝鮮の知識人・俞晩柱^{ユマンジュ}が内面を吐露した漢文日記を検討しながら、士大夫の「分裂した自我」を描き出している。イザベル・リヒターは18～19世紀の166点の日記を内面・主体性そして死という観点から検討しながら、自律的主体とはいえない「私」のあり方を論じている。全く異なる歴史的文脈から、分裂した「個」のあり方が取り出されているのはたいへん興味深い。

第3部以降は朝鮮半島が主要な舞台となる。第3部「異民族を支配する」には朝鮮半島に渡った日本人による日記の研究をまとめた。山本浄邦は1890年代の真宗大谷派僧侶による朝鮮布教日記を、松田利彦は日露戦争期の朝鮮駐箚軍参謀長の日記を、李炯植^{イヒョンシク}は1910年代の朝鮮憲兵隊司令官の日記をそれぞれ検討した。いずれも「植民地化する側」の個人記録を通じて、具体的な支配政策の推進過程や表には出ない支配意識を読み取ることができる。続けて読むことで1890年代から1910年代にかけて植民地化が深まっていくにつれ、政策と意識がどのように変化して絡まり合っていくのかが見えてくる。また、かれらと関係を結んだ朝鮮人の反応を見ることで、

限定的ながら朝鮮社会側の動向もうかがうことができる。

第4部は「植民地状況を生き延びる」と題し、日本の植民地下を生きた朝鮮人の書き残した個人記録を検討した3本の論文を集めた。^{クオン}権 ボドウレは、日記のみならず書簡や個人文集などを活用しながら、19世紀生まれの父子が植民地化をどのように経験したのかを論ずる。鄭炳旭は仕事を探して1930年代に大阪に渡った農村青年の日記を、板垣竜太は1940年代に京都に留学していた苦学生の日記をそれぞれ扱った。3論文はいずれも海峡をこえて日本に渡った朝鮮人の経験を扱っている。かつて朝鮮史研究者の梶村秀樹は、戦前期にはからずも形成され戦後にも継続することになった、朝鮮と日本にまたがる生活や意識のあり方を「国境をまたぐ生活圏」と呼んだ¹⁸。3論文は「国境をまたぐ生活圏」の異なった様態を個人記録から描写している。

第5部は1945年の朝鮮解放以降の数年間の歴史的経験を扱った。太田修は仁川に住む電気工の日記を通じて政治意識、労働の状況、生活難といった状況を描き出している。^{キムムヨン}金武勇の研究は日記を対象としたものではないが、朝鮮戦争の時期に家族の虐殺を体験した遺族の自叙伝や伝記を読み解きながら、遺族らが家族史の構築を通じてアイデンティティを確立し、国家暴力に抵抗する主体となっていくことを論じた。2本の論文は、1945年の植民地からの解放が真の意味での解放ではなかったことを具体的に叙述しており、その意味で第5部は「解放なき「解放」を迎える」と題した。

日記研究の蓄積のある日本やドイツに比べれば、朝鮮半島を中心とした研究は端緒についたばかりである。今回は、枠組や分析方法の統一や厳密な分担をおこなうことなく進めたため、ややばらばらな印象はあるかもしれないが、にもかかわらず近世・植民地・冷戦という歴史の大きな流れを

¹⁸ 梶村秀樹「定住外国人としての在日朝鮮人」(『思想』734号、1985年。『梶村秀樹著作集』第6巻、明石書店、1993年所収)。

個人記録から読み解く一つのパイロット・ケースにはなっていると考える。日記に関する共同研究はその後も続いており、さらなる発展をめざしたい。

本書（日本語版）は当初、商業出版社からの出版を考えていたが、最終的に同志社コリア研究叢書を立ち上げ、その第1集として刊行することにした。その趣旨と経緯については、「同志社コリア研究叢書創刊に寄せて」を読んでいただきたい。それに付言するならば、コリア語版の出版後、同志社コリア研究センターは高麗大民族文化研究院との国際共同研究「朝鮮半島と日本を越境する植民地主義および冷戦の文化」が、「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（2013-15年度）に採択された。その中に個人記録に関する国際共同研究を組み込んでいる。その一環として、本書は企画されたものである。

この本が出るまでに多くの方々のご助力を得た。まず企画研究チーム「個人の伝統と近代」の共同研究者として、本書の執筆者以外に金敏喆^{キムミンチョル}、裴錫滿^{ソンマン}、蘇賢淑^{ソヒヨンスク}、ピオンティーノ・ユリアン（Biontino Julian）、兪相姫^{ユサンヒ}、李松順^{イソン}、李庸起^{イヨンギ}、広瀬貞三の諸氏とは、ともに資料を読み、議論し、現地調査をおこなった。金吉浩^{キムギロ}氏、高野昭雄氏は大阪と京都の現地調査を案内してくださった。ドイツの筆者とのつながりについては、チュービンゲン大の李有戴^{イユジェ}（You Jae Lee）氏のお世話になった。企画研究チームのセミナー、学術会議、現地調査、韓国語版の刊行にあたっては張寅模^{チャンインモ}氏と李明學^{イミョンハク}氏が奔走した。日本語版の出版に際しては、小川原宏幸氏が丁寧な校閲を、研究支援員の柳美佐氏が細々とした仕事をしてくださった。また大本幸恵氏のデザインのおかげで、本書は非常に綺麗な装幀の本となった。これら全ての方々に感謝申し上げる。

また、企画研究チームが始まった頃に激励してくださった高麗大の金興圭^{キムフン}氏、趙性澤^{チョソンテク}氏、企画研究チームを常に後押ししてくださった高麗大民族文化研究院の崔溶澈^{チュエヨンチョル}院長、日本の研究者を紹介してくださった京都大

の水野直樹氏にも感謝する。民族問題研究所が日記を利用させていただき、貴重な資料を得ることができた。いま研究所が推進している「市民歴史館」の建設に対し声援を送る。今回、共同研究の枠組構築にあたっては京都 코리아学コンソーシアムの助力もあったことを付記しておきたい。